

学校種を越えた連携と大学初年次教育

安永 悟
久留米大学

どうもありがとうございました。

先日、某所で100名ほどの研究者を前に講演する機会をいただきました。時間は40分間です。「40分間では何も話せないな」と思いながらも、時間いっぱい一生懸命に話しました。ただ、講演を終えると、虚しさを感じました。自分が何かを伝えられたという実感がなかったからです。私が伝えたいと思っていたことを話しはしたけれど、何が伝わったのだろうか、と。講演当日、私は自分の講演を終えてすぐに帰らなければならなかったのですが、講演後に行われた懇親会は失礼したのですが、懇親会では「もっと聞きたかった」という好意的な話が出たと、後日、講演会に出席した知人からのメールで知りました。私はその時、少しは伝わっていたのだと、非常に安心しました。

本日いただいた講演時間は10分間です。もう3分が経っていますから、残り7分間しかありません。いまお話しした講演の後で、私は決めました。たとえ10分間であっても必ず何らかの活動を入れる、と。それがアクティブ・ラーニングの原点であろう、と。そこを外したら私の良さは半減すると。皆さん、長時間にわたって、ずっと聞きっぱなしでしたので、先ほど2分間でしたが、近くの人と情報交換していただきました。

さて、本題に入ります。私の講演のタイトルは、「学校種を越えた連携と大学初年次教育」。私が言いたいことは、このタイトルに尽きています。「真の学力」に裏打ちされた「現場で活躍できる人材」を育成するためには、学校種を越えて「協同学習」を基盤とした「アクティブ・ラーニング型授業」を展開することが重要である。これが、私の最も伝えたいことです。

また、大学初年次教育は入学時における学生の育ち、つまり真の学力に応じて教育内容と方法を常に更新していく必要があるということです。これは、安西先生が先ほどの基調講演で提起された「高校と初年次、初年次と専門教育との関係をどう考えるのか」という問題に対する答えにもなると、私は考えます。

では、初年次教育にかかわる活動の意義とは何か。安西先生は、未来に生きる人々のためだとおっしゃっていました。私も同感です。私は、「すべての人が平和で幸せに暮らせる社会」をつくることに貢献できる人材を育てたいと思い、このような活動をしています。

「現場で活躍できる人材の育成」と、スライドに掲げています。現場で活躍できる人材とは、どのような人材でしょうか。現場の先生方一人ひとりが、そのイメージを持っていると思います。「現場で活躍できる人材」とは、協調性のある主体的で能動的な学習者であると考えています。そのような人材をいかに育てるか、私が思案し始めた頃は、アクティブ・ラーニングという概念がまだ一般的ではありませんでした。いろいろ考えた末に私が出会ったのは、協同学習です。協同学習とは「協同の精神」に基づく学習であると、

私は考えています。

私は、2007年に小学校の現場に入りました。それまでは大学で研究を行っていましたが、あることがきっかけで小学校の授業を指導することになりました。そこで分かったことは、小学校から大学まで同じ子どもを育てているにもかかわらず、小学校は小学校だけ、中学校は中学校だけ、高校は高校だけ、大学は大学だけというように、縦のつながりががないということです。私が小中連携のプロジェクトに関わった時は、中学校と小学校とにつながりがないだけでなく、私がかかわっていた地域で一つの中学校区を構成する二つの小学校同士のつながりも見られませんでした。つまり、縦のつながりも横のつながりもないまま、子どもを育てようとしているわけです。そのため私は、高校と大学との接続だけに目を向けるのではなく、就学前の幼稚園や保育園から大学までの学校教育が一貫した方向性を持って指導できるような体制を構築することが必要であり、その実現に向けた活動を行っています。そして、2010年頃から、アクティブ・ラーニングという言葉に意識するようになりました。ここから先は皆様と同じだと思います。

能動的学習という言葉をよく耳にし、目にします。では、能動的学習とはどのような学習でしょうか。学習目的の達成に向け、真剣に考え、対話し交流し、互いに励まし、高まり合うという、目に見える活動を含む学習が能動的学習であると、私は捉えています。能動的な学習を行おうとする際に、「こんな授業なんだろうな」「こんな活動をすれば大丈夫だろうな」とイメージすることはできても、何をしたら活動的な授業になるのかという具体的なところについては、クエスチョンマークがたくさん付く。そうした先生方が、本日の会場にもいらっしゃるかもしれません。

そこで、能動的学習を行うために、何か良い例がないかと模索した結果、グループによる学習法が注目されるようになりました。それが多くの場合、アクティブ・ラーニングにつながります。現在では、このような多くの学習法が教育現場に外国からどんどん入ってきていると思います。しかし、だからといって、外来の新しい学習法によって授業をすれば、それですぐにアクティブ・ラーニング型授業になると考えるのは早計でしょう。日本の小・中学校では、現場で培われてきたさまざまなグループ学習や、その範疇に入る学習法があり、実践や研究も重ねられています。それを無視して、外国から入ってきた学習法を用いればアクティブ・ラーニング型授業になると考えることには問題があると思います。自分たちの先輩が培ってきた授業の方法や授業のつくり方をもう一度見直し、課題を検討しながら先へ進むことによってこそ、足が地についたアクティブ・ラーニング型授業を実践できる場合が多いのではないのでしょうか。

アクティブ・ラーニング技法を形だけ導入することはやめたほうがよいと思います。例えば、私が研究している協同学習という技法は、非常に洗練されています。そのため、教師が理論を理解せずに技法だけを授業に取り入れても、最初はうまくいくでしょう。しかし、何度も繰り返し用いていくうちに、次第にマンネリ化してマイナスの効果が出てくるが多々あります。これと同じような失敗は、かつて日本の小・中学校でありました。さまざまなグループをベースとした学習を小・中学校で行ったけれどもうまくいかなかった。そうした歴史があるわけです。なぜうまくいかなかったのかを、私たちはもう一度考える必要があるでしょう。

我田引水のようなのですが、いま求められているのは、協同学習を基盤としたアクティブ・

ラーニングの構築だと、私は思います。アクティブ・ラーニングについては、京都大学高等教育研究開発推進センターの溝上慎一教授が、著書で「アクティブ型授業の基本的理解は協同学習の論に求めることができる」と述べています。私もその通りだと思います。

協同学習とは「グループの教育的活用であり、グループの学習目的を達成するために、学生が自分と他者の学習を最大限高めるために協同して学ぶ、学習することである」ということです。別の言い方をすれば、「学習仲間とともに変化成長することを心から願う協同精神に基づく学習」ということになるでしょう。自分さえ良ければいいということではなく、自分も仲間も一緒に伸びるんだ、と。子どもにも学生にも、なれ合いのグループではなく、協同精神のあるグループ内で切磋琢磨しながら真剣に学び合ってほしいと思います。

協同学習を基盤とした授業をいかに組み立てるか。これが、アクティブ・ラーニングを成功させる鍵になるだろうと、私は考えます。現在のアクティブ・ラーニングの技法は変わる可能性があります。技法は変わっても構いませんが、協同学習のベースにある理念は不易です。先生方には、変わらない理念に基づく授業づくり、アクティブ・ラーニングを実践していただきたいと思います。

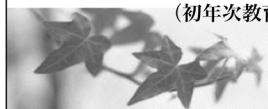
最初にお話したように、私がこの講演でお伝えしたいことは、学校種を越えた連携と大学初年次教育を、アクティブ・ラーニング型授業を通して展開してはいかがでしょうかということです。また、大学初年次教育は、入学してきた学生が身につけている力によって、絶えずつくり直していかなければなりません。つまり、これさえやっておけばいいという初年次教育はあり得ないということです。

時間を超過してしまいました。ご清聴ありがとうございました。

学校種を越えた連携と 大学初年次教育

安 永 悟

(初年次教育学会会長・久留米大学教授)



1

私の主張

- 「真の学力」に裏打ちされた「現場で活躍できる人材」の育成には学校種を越えて「協同学習」を基盤とした「AL型授業」を展開することが肝要である
- 大学初年次教育は入学時における学生の育ち（真の学力）に応じて教育内容と方法を常に更新する必要がある

2

これからの教育

- 教育目的
 - 現場で活躍できる人材の育成 大学
(協調性のある主体的で能動的な学習者) (初年次教育)
 - 教育方法
 - × 教師主体「教え込み中心」授業
 - 学生主体「学び合い中心」授業
- ↑
- 協同学習
「協同の精神」に基づく学習
- ↑
- 小学校
(幼保)
- アクティブ
ラーニング

3

ALの定義

- 学生が主体性を持って多様な人々と協力して問題を発見し解を見いだしていく能動的学修 (学習) (中教審, 2014)
- 能動的学習は、学習目的の達成に向け、真剣に考え、対話・交流し、互いに励まし、高まり合うという目に見える活動を含む (安永, 2015)

4

グループを用いた学習技法 (AL)

- 現場で培われてきた各種グループ技法
 - PBL問題解決型学習法 Problem Based Learning
 - プロジェクト型学習法 Project Based Learning
Group Investigation
 - 反転学習、TBL Flipped Learning
Team Based Learning
 - LTD話し合い学習法 Learning through Discussion
 - ジグソー学習法、特派員
 - ラウンドロビン、シンク=ペア=シェア
- その他、多数

5

AL型授業に潜む危険性

- 形だけのAL技法の導入
 - 期待した成果が得られることもある
 - 多くの場合、マイナス効果
- 歴史は繰り返される
 - 単なるグループ学習の弊害
(班学習・集団学習、その他)

6

ALで「真の学力」を育むために

- 「協同学習」を基盤とした
AL型授業の構築 (安永, 2015)
- AL型授業の基本的理解は
協同学習の論に求めるこ
とができる (溝上, 2014)

7

「協同学習」とは

- 温故知新
 - 1950年代後半からの研究・実践の蓄積
 - 「協同学習」の有効性は実証済み
 - 「協同学習」基盤授業をどう仕組むか
= AL型授業成功の鍵
- 不易と流行
 - 不易としての「協同学習」
 - 流行としての「AL技法」

8

参考文献

- 須藤文・安永悟 (2010) PISA型読解力を育成するLTD
話し合い学習法の実践：小学5年生国語科への適用.
協同と教育, 6, 122-124.
- 須藤文・安永悟 (2011) 読解リテラシーを育成するLTD
話し合い学習法の実践：小学校5年生国語科への適
用. 教育心理学研究, 59, 474-487.
- 須藤文・安永悟 (2014) LTD話し合い学習法を活用し
た授業づくり：看護学生を対象とした言語技術教育.
初年次教育学会誌, 6, 1, 78-85.

9

関連図書 1/3

- (1) ディープ・アクティブラーニング
松下佳代 (編著) 勁草書房 2015
- (2) アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換
溝上慎一 (著) 東信堂 2014
- (3) LTD 話し合い学習法
安永悟・須藤文 (著) ナカニシヤ出版 2014
- (4) 協同学習の新しい形：看図作文レポートリー
鹿内信善 (著) ナカニシヤ出版 2014
- (5) 初年次教育の現状と未来
初年次教育学会 (編) 世界思想社 2013

10

関連図書 2/3

- (6) 学士力を支える学習支援の方法論
谷川裕穂 (編著) ナカニシヤ出版 2012
- (7) 協同学習を取り入れた英語授業のすすめ
江利川春雄 (編著) 大修館書店 2012
- (8) 活動性を高める授業づくり：協同学習のすすめ
安永 悟 (著) 医学書院 2012
- (9) 協同学習入門：基本の理解と51の工夫
杉江修治 (著) ナカニシヤ出版 2011
- (10) 学習の輪：学び合いの協同教育入門
ジョンソンら (著) 石田・梅原 (訳) 二瓶社 2010

11

関連図書 3/3

- (11) 協同学習の技法：大学教育の手引き
パークレイら (著) 安永 (監訳) ナカニシヤ出版 2009
- (12) 個に応じた学習集団の編成
アイルソン・ハラム著 杉江ら訳 ナカニシヤ出版 2006
- (13) 先生のためのアイディアブック
ジェイコブスら (著) 関田 (監訳) ナカニシヤ出版 2005
- (14) 大学授業を活性化する方法
杉江ら (著) 玉川大学出版部 2004
- (15) 学生参加型の大学授業：協同学習への実践ガイド
ジョンソンら (著) 関田 (監訳) 玉川大学出版部 2001

12

協同教育のすすめ

- 授業づくり研究会（安永研究室主催）
 - 目的： 協同による授業づくりを通して
自他が変化成長する
 - 活動： 授業の実践・研究
 - 仲間： 幼保～大学の教師、教育関係者
 - 場所： 久留米大学御井キャンパス
 - 参加： 安永研HPで申込
<http://yasunaga.me>

13

JASCE 協同教育のすすめ

- 日本協同教育学会 JASCE
(Japan Association for the Study of Cooperation in Education)
 - 互恵的な信頼関係を基盤とした協同に
基づく教育学習環境を創造普及する
- 第12回全国大会（久留米大学）
 - 日 程 10月16日(金) - 18日(日)
 - 参加申込 学会HPより <http://jasce.jp>

14